

都市化の波にも「拓魂」は残る

滋賀県東近江市の八日市開拓は、琵琶湖の南東に位置し、湖との間には、戦国武将、織田信長が建てた安土城跡がある。

同開拓地は、旧陸軍飛行場跡地で、標高 130m ほどの比較的平坦な土地である。しかし、滑走路付近には空襲により壊れた武器庫や、練習機の残骸などが散乱し、荒地となっていた。

この地域の土地は石が多く、開墾というより、石出し作業といわれるほどで、この地のことを「地球の骨」と称されることもあった。握った鍬の柄は赤く血に染まった。

46 年冬に 46 名が入植し、そのほとんどが、旧兵舎での生活となった。その年は異常なまでに降雪が多く、開墾の出鼻を大雪にくじかれた。

初年度に主に栽培したのはジャガイモやカンショだったが、収穫したイモはあまりに小さかった。48 年頃より徐々に桃などの果樹を植えていくと、2 年後には実をつけるようになった。

50 年に揚水機（ポンプ）施設が補助事業で完成し、畑地の水田化が行われた。自分たちの手で収穫した香り高い新米は、格別のものであった。

桃なども、八日市開拓農協のラベルが付いたケースで出荷されるようになった。開拓事業が軌道に乗ってきたのである。

53 年には役牛が耕運機に変わり、酪農家が急増してきた。

ところが、日本経済の発展に伴い、八日市市は市発展のため、工場誘致が強く推進されることとなってしまった。当開拓地や近くの長谷野開拓地なども工場団地化された。行政と粘り強く交渉したが、手塩にかけた開拓地の多くが、工場や住宅に変貌した。

79 年、初代入植者らにより、地元の会館敷地内に、当地の発展を願って開拓碑が建てられた。

現在の当地は、名神高速道路が走る、工場地帯となっている。

しかし、工場と住宅の間にある手入れが行き届いた田んぼには、収穫間近の稲が黄金色に輝いていた。しっかりと「拓魂」は受け継がれている。

八日町 25-213-2

①調査日 平成30年9月19日

②所在 東近江市沖野町

③地区の沿革 昭和20年12月解放された飛行場跡地に46名が入植した。

④設置年月日 昭和54年1月

⑤設置者 入植者

⑥碑文（表面） 拓魂

滋賀県知事 武村正義書

昭和五十四年一月吉日建立

拓魂碑の隣に初代入植者三十九名の氏名碑

⑦碑文（裏面） 顧みるに昭和二十年十一月戦後の国策である食糧増産と併せて拓士達による新農村建設を目的とする緊急開拓事業のために発足した当地は、蒲生、神崎両郡の境界線を中心にもつ飛行場跡地であり、我々も此処を永住の地として同年初冬の十二月此の地に第一歩を印した。翌春四十六名による開墾作業は敢行された。異郷の地での生活は容易でなく剩え石礫が非常に多く人力による開墾作業はまことに困難を極めたが、一致協力あらゆる困苦に耐え営農の拡充に期した。 / 同三十三年四月、自らの力と良き理解者を得て、幸にも当沖野町の制定をみるに至ったのである。 / 以来二十幾星霜此の度当町在住の拓友相計り悲運にも開拓の夢半ばに世を去った肉親同志を偲び、諸霊の冥福を祈るとともに、我々もまたこの碑に集い近隣の人々とともに当地の発展を願わんとして、此の地に、拓魂の碑を建立するものである。

昭和五十四年一月吉日

⑧現在の状況 地区の会館地内で管理されている。